

屈折について

Semiword 同士が結びついて新たな semiword を構成することを「屈折」と言います。動詞、形容詞、名詞、時名詞、形容名詞には屈折があります。屈折には、いくつかの特別な規則があります。筆者：twitter.com/awesomenewways

屈折の一般について

Semiword の種類

Semiword には以下の種類があります。

(1) Semiword の種類：

- (1)a. monotonal: 条件アクセントでないアクセントが一つだけあるもの。
- (1)b. semitonal: 条件アクセントが一つだけあるもの。
- (1)c. bitonal: アクセントがちょうど2つあり、後部だけが条件アクセントであるもの。
- (1)d. atonal: アクセントがないもの。

条件アクセントの一般規則

条件アクセントは、以下の規則に従います。

(2) 条件アクセントの一般規則：

- (2)a. 語基のアクセントが語基の末尾にあるときは、自身が上つきになり、語基のそのアクセントは下つきになります。

(2)b.語基のアクセントが自身の1モーラ左か、それよりも右側にあるときは、自身が上つきになり、語基のそのアクセントは下つきになります。

(2)c.ただし、語基のアクセントが語基の冒頭にあるときは、条件アクセントは常に下付きになり、語基のそのアクセントは常に上付きです。

屈折記号

語尾となる semiword はその綴りの中に屈折記号を持ちます。屈折記号には音価はありません。

形容詞と動詞の屈折には・(middle dot) を使い、名詞、形容名詞、時名詞の屈折には - (hyphen minus) を使います。

規則的な動詞

動詞には屈折が規則的なものとそうでないものがあります。ここでは規則的なものを扱います。

語基の種類

動詞の種類を示します。動詞は末尾の字母とアクセントによって分類されます。末尾の子音は1モーラと数えます。

末尾の字母	アクセント		
	0	2	1
é	katamé'	'tabé	hami'dé
i	i'	mu'kui	
k	hatarak'	u'gok	
g	sosog'	o'yog	
s	kas'	'das	

末尾の字母	アクセント		
	0	2	1
t			'kat
n		sɪn'	
b		tob'	yoro'kob
m		nozom'	na'yam
r		tukar'	tu'kur
w		tukaw'	ha'raw

屈折によって削除されたり変形したりする分節音

動詞の屈折は、語基の分節音の末尾が変化するため少し複雑です。これは例えば以下のように、語尾の冒頭に特定の分節音を仮定することによって説明されます。

(3) tob' + '(_)^r·u → 'tob'^r·u → 'to'b·u

(4) tob' + t·a → tob't·a → tonn'd·a

このように、条件によって削除されたり変形したりする分節音は、屈折記号の左側にあると仮定されます。これは表記において語尾の形が一貫しているように見えるようにするためです。

屈折記号の左側に母音があり、かつ語基の最後の分節音が母音の場合は、連続する2つの母音が最終的に1つになる場合があります。そのような場合に、その2つの母音にアクセントが挟まれているときは、最終的に得られる表記においてアクセントはその2つの母音の位置するモーラの直前に移動します。

(5) 'tabé + 'a·na_i → 'tabé'a·na_i → 'ta'bé·na_i

また、モーラの途中にアクセント記号がある場合も、最終的に得られる表記においてはアクセントはそのモーラの直前に移動します。

(6) sɪn' + i → sɪn'i → si'n'i

ただし、表記上は、アクセントは屈折記号を超えては移動しません。

(7) koros' + r·arè, + t·a → koros' + r·arè' + t·a → koro's·'arè't·a

語の終端に屈折記号が現れる場合

語の終端に屈折記号が現れる場合は、最終的な表記においてその屈折記号を削除します。

(8) tu'kur + r· → tu'kuri· → tu'kuri

語尾の種類

語尾も semiword なので、semiword の分類のうちのいずれかに当てはまり、かつ条件アクセントの一般規則に沿うような形状が仮定されます。

次のページの表は語尾の形状の例示です。

r	a	y	t	i
'(_).r·u	'a·na,i	y·'ōu	t·a	I·
'(_).r·u,to	'a·naide	y·'ōu,to	t·e	I·'naga,ra
'(_).r·éba	'a·zu	y·'ōuka	t·ara	I·é
r·aré,	'a·naidesu	y·'ounimo	t·ekara	I·'ōé
r·asé,	'a·naidesuka		t·emade	I·ha'zimé
'(_).r·uni	'a·nakatta			I·ō'war
'(_).r·uyori	'a·nakattadesu			I·'tutu
'(_).r·una	'a·nakattadesuka			I·'wuru
	'a·nakattari			I·há
	'a·nakattara			I·mo
	'a·na,ku			I·sika
	'a·nakute			I·ni
	'a·nakereba			I·masu
	a·naka'rou			I·masuto
	a·naka'rouri			I·masuka
	'a·neba			I·ma'senn
	'a·zu,ni			I·ma'sennka
				I·ma'senndesita
				I·ma'senndesitaka
				I·masita
				I·masitaka
				I·masite
				I·ma'syou
				I·ma'syouka
				I·ta,
				I·sou,
				I·gati'
				I·'tutumo
				I·'sugi
				I·ya'gar

「イ」のドット

Semiword の綴りの一般規則に従い、「イ」はデフォルトでドットなしの i ですが、屈折で wi が得られる場合はその二文字を i 一文字で置き換えることによりドット付きの i が現れます。

(1) o'mow + i·'masu → o'mowi·'masu → o'moi·'masu

また、直前に e が置かれる場合で、「イ」と発音される部分はドットつきの i で表記します。（これは子音終わりの動詞で最後の母音が e であるものについて一般に言えます。）

(2) yura'mek + t·e → yura'meit·e → yura'meit·e

不規則な接辞

られる（可能）、ろ（命令）などのいくつかの接辞は、つき方が不規則なので、それがついた形を、全体を一つの semiword として表記します。そのような接辞がついた形に規則的な屈折が認められる場合は、その屈折における語尾にあたる部分は通常の語尾として表記します。

例えば、「食べられる」「行ける」「飲め」はそれぞれ tabe'ra'rér·u, i'ké'r·u, 'nome となります。

不規則な動詞

来る、する、問う、乞う、厭う、憂う、行く、関する、ある、など¹の屈折に不規則な点があるものは、屈折記号と語基を分けずに、あたかもそれ以上分割できない semiword であるかのように表記します。

¹ 「問う」「乞う」「厭う」はそれ自体がグループを構成しており、頻度等から考えても不規則動詞とすべきかについては疑問がありますが、教育ローマ字の規則の中では不規則動詞として取り扱うことにします。

ただし、「これらの不規則な”動詞”は動詞としての規則的な屈折を持っていないのだから、それ自体が分割できない一つの semiword なのだ」とは考えません。これらの不規則な動詞が「屈折境界」の右側の要素に位置することがあるからです。

不規則な接辞の場合と同様、語尾がついた形が屈折する場合は、規則的な屈折が認められるところで区切り、以降を通常の語尾として表記します。

規則的な形容詞

語基の種類

形容詞の種類を示します。形容詞はモーラ数とアクセントによって分類されます。

モーラ数	3モーラ		2モーラ		1モーラ
アクセント	0	1	0	2	1
	yasasi'	kawai'i	aka'	'haya	'ko

なお、2モーラの形容詞では、アクセントが 1 であるようなものもあるかもしれません。特定の発話を記録する場合や、教授方針によって特定の2モーラ形容詞のアクセントを 1 としたい場合は、そのように表記することができます。

不規則な形容詞

「よい」「いい」「ない」は不規則な屈折形がある（三者に共通する不規則性としては「そう」をつけた場合に「さ」が挿入されることが挙げられる）ため、動詞の場合と同様、あたかも全体でそれ以上分割できない semiword であるかのように表記します。

屈折境界

一部の不規則な屈折詞を表記する際に、語形のある部分に「屈折境界」と呼ぶなんらかの境界を見出し、その直前の音節にドットをつけることでマークします。

不規則な屈折

不規則な動詞の中には、「関する」のように、屈折の仕方が他の動詞と共通しているものがあります。

「関する」は [kann'suru], ['kannsítē], [kann'sínai] のように屈折しますが、これは「反する」 ; [hann'suru], ['hannsítē], [hann'sínai] とアクセントと最終2モーラが共通です。

このように、不規則な複数の屈折詞の屈折に共通の要素があるとき、以下の条件で特定の箇所に屈折境界を認め、その左側の要素の最終音節の最初の母音にドットをつけます。「関する」と「反する」の屈折はそれぞれ、kánn'suru, 'kánnsite, kánn'sínai, hánnsuru, 'hánnsite, hánnsínai となります。

(1) 2つの屈折詞のあるところに屈折境界を認める要件：

(1)a. そこが漢字の読みの内部ではなく、

(1)b. そこがカタカナで書かれる部分の内部ではなく、

(1)c. そこを境に右側の分節音のパターンが全ての屈折形で完全に一致し、

(1)d. アクセントが全ての屈折形で完全に一致する場合

不規則なアクセント

動詞のアクセントは原則として 0 または 2 ですが、「はみ出る」の語基のアクセントは「はみ出て」 [ham'dete] から分かるとおり 1 です。

これは「出て」の語基が1モーラであることから連想可能なので、「はみ」と「出る」の間になんらかの境界があると考えられるように、その境界の左側の要素の最終音節である「み」の母音にドットをつけ、語基を *hami'dé* とします。